

巻 頭 言

事務屋と技術屋



執行役員 南 荘 淳

阪神高速には、以前から事務屋、技術屋という職業がある。

文字から言えば、事務屋は事務を生業とする人、技術屋は技術を生業とする人となるが、現実には必ずしもそうではない。交渉や折衝を得意とする事務一筋の技術屋もいれば、数学的基礎に基づくプログラムを駆使して、分析業務をこなす事務屋もいる。実は我々の世界では、大学でいえば、法学部や経済学部など、いわゆる文系の学科を卒業した人の集団を事務屋と呼び、工学部など理工系の学科を卒業した人を技術屋と呼んでいるにすぎない。

公団時代は、会社の中に小窓のついた壁で仕切られた「事務屋」、「技術屋」という二つの部屋があり、それぞれに入り口があって、一度そこに入れば一生その部屋で過ごしてきた。窓越しに会話はできるが、行き来はできない世界であった。しかしながら、民営化してからは壁に扉が付けられ、ときどき隣の部屋へ行くことができるようになってきた。

実務の世界では、間違いなくボーダレスになってきていて、交流人事も少しずつではあるが進んできている。これからの配属は、学生時代に何を学んだかではなく、各自の関心のあるテーマであるかどうかとか、本人の個性や能力を生かす仕事であるかどうかとか、一層問われることになるであろう。

それでは、それぞれの集団は意味がなくなったのであろうか？

私は、担当業務がどれだけボーダレスになったとしても、各自のよって立つアイデンティティーの根幹として、厳然として意味あるものではないかと考えている。

特にいわゆる技術屋と呼ばれる工学系の専門分野を選択した我々は、モノ創りを生き甲斐とする集団であり、自らが学んだ技術を生かす仕事をしたいと少なくとも一度は考えたはずである。

この、新しいものを創りだしたいという志向が大変重要ではないかと思う。民営化された阪神高速にとって、新線建設やネットワーク整備だけが目的ではなくなった。地域やお客様のためにいかに貢献できるかが会社の使命である。しかし、道路管理においても、業務のマネージメントにおいても、新しい仕組みやシステムを生み出すためのエネルギーには、新しいものをイメージーションする能力や創造する喜び、想いが必要であることは間違いない。

一方で、我々はデータや技術を過信し、独善的になる可能性もある。ビジネスに重要なコミュニケーション能力を向上させて、専門外の人にも丁寧に説明して理解を得るスキルが必要であり、その点では文系の人間に学ぶ点も多いと思われる。

解剖学者として有名な養老孟司先生が、ある雑誌に「理系と文系の思考の違いとは？」というエッセイを書いている。この中には次のような記述がある。「人間の抱える問題の多くは、当然ながら理系の角度だけでは解決できない。いい案を出そうと思ったら、X軸とY軸のように直角に理系と文系をくっつけるのが良い。X軸からY軸を見れば、何をやっていようが全部ゼロ。Y軸からも同じ。お互い関係ないと思っていれば何も起きないが、無理やりにでも協力し合えば合力が生まれるのである。」大変うんちくのある言葉ではないだろうか。